

3歳児 保育構想案

草津市立老上こども園

教諭 川村 桃佳

1 単元名 『おがくず粘土で遊ぼう！』

2 単元の目標

- ・おがくず粘土を土に還したり、くり返し使ったりすることで、その性質や仕組みを知
る。 (知識および技能の基礎)
- ・自分の感じたことや考えたことを形にしたり、友だちや保育者に伝えたりしながら遊ぶ
楽しさを感じる。 (思考力・判断力・表現力の基礎)
- ・指や手のひらを使って、感触を楽しむ。 (思考力・判断力・表現力の基礎)
- ・丸めたりちぎったり、好きな形を作ったりして楽しむ。
(思考力・判断力・表現力の基礎)
- ・友だちにも思いや考えがあることを知り、互いの表現を認めたり大切にしようとしたり
する。 (学びに向かう力・人間性)
- ・身の回りの自然や環境に興味をもち、大切にしようとする。(学びに向かう力・人間性)

3 単元について

(1)教材観

この活動では、木が原材料である「おがくず」を混ぜて作られた「おがくず粘土」を使って遊ぶ。「おがくず」は、主に木材の加工や鉛筆の削りかすから生まれる。いわゆるゴミとして処理されがちなものであるが、それらを再利用、再資源化することで、環境保全に繋がったり、自然環境を大切にしようとする意識を高めたりすることができる。

「おがくず粘土」は、軽く、ふわふわした感触が特徴的である。乾燥すると、木のよう
に固まる性質をもつが、固まった後は、穴を開けたり色を塗ったりして加工することができる。安全性が高く、また、簡単に加工をすることができるため、創造力、発想力を
育むことができる。

(2)子ども観

1年を通して、さまざまな感触遊びを行っている。戸外では、砂や水を使った遊び、室内では、米粉粘土、もち粉粘土、油粘土を使った遊びを楽しんでいる。指先や手のひらを使って「ベタベタ」「ふわふわ」「ぱさぱさ」といった、それぞれの特徴を存分に感じていた。また、粘土遊びではそれぞれ違う感触に疑問をもち、「何でできているの?」「前の粘土とは何で柔らかさが違うの?」と保育者に尋ねる姿も見られた。「おがくず粘土」を使

って遊ぶことで、今までとは違った感触、匂いを味わい楽しむことができたり、素材によって感触が変わる面白さを感じたりすることができる。

(3) 指導観

まずは、「おがくず粘土」で遊ぶ楽しさを存分に感じてほしい。保育者も一緒に遊びながら、感触や匂い、音、など、さまざまな面白さを味わったり、何度も形を変えて繰り返し試したり工夫したりして遊ぶ楽しさに共感したりして関わる。その中で、一人ひとりの楽しみ方を認めたり、その姿を周りにいる友だちに知らせたりして、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを感じたり、友だちの思いや考えを知ったりできるようにする。

作ったものは作品棚に飾れるように環境を整えることで、自分や友だちの作ったものを大切にしようとする気持ちを育む。また、しばらく置いておくことで、子どもたち自身が「おがくず粘土」の様子が変わっていることに気づき、「なぜ」「どうして」と探求心を育むことができるようにする。さらに、再資源化できることを伝え、身の周りの環境に興味をもったり、自然のものを大切にしようとする気持ちを育んだりできるようにする。

(4) ESD との関連

○本学習で働かせる ESD の視点

相互性・・・再生やリサイクルについて知ることができる。

多様性・・・一人ひとりがしたい遊び方をする中で、友だちにも、さまざまな思いや考えがあることを知ることができる。

乳、卵などのアレルギーをもつ人も、安全に楽しむことができる。

公平性・・・保育者がさまざまな思いや表現を尊重したり、認めたりすることで、一人ひとりが大切にされていることを感じるすることができる。

○本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

・多面的・総合的に考える力

おがくず粘土は、再利用したり、土に還して再資源化を行ったりできることを知る。

・コミュニケーションを行う力

自分の思いや考えを、さまざまな方法で伝える楽しさを感じる。

・つながりを尊重する態度

作ったものを固めて飾ったり、繰り返し遊んだりする中で、自分で作ったものに愛着を感じたり、友だちのものも大切にしようとしたりする気持ちを育む。

○本学習で変容を促す ESD の価値観

・世代内の公正

自分と友だちとの思いの違いに気づき、それらは違っても良いことを知ったり、大切

にしようと考えたりする。

- ・自然環境、生態系の保全を重視する

使わないもの、不要になったものをすぐに捨てるのではなく、工夫次第で再利用できることを知る。ものを大切にしようと考え、無駄にしないようにしたり、不思議さや美しさを味わい、自然環境を慈しむ気持ちを高めたりする。

○達成が期待される SDGs

- ・15 陸の豊かさを守ろう
- ・12 つくる責任 つかう責任

4 単元の評価規準

(ア)知識及び技能の基礎	(イ)思考力・判断力・表現力の基礎	(ウ)学びに向かう力・人間性
① おがくずでできていること、おがくずとはどういったものなのかを知っている。	① 指先や手のひらを使って、丸めたりつぶしたり、ちぎったりして感触を味わいながら遊んでいる。	① 「もっと触りたい」「作りたい」と、意欲的に粘土に触れて遊んでいる。
② 使い終わった粘土を集めて保管して再利用したり、土に還したりできることを知り、実践している。	② 食べ物に見立てたり、好きな形を作ったり、型抜きやナイフなどの道具を使って遊び、さまざまな形を作ったりして遊んでいる。	② 作ったものを室内に飾ったり、自分や友だちの作ったものを見て喜んだりして、大切にしようとしている。
	③ 「こうしたらどうなるかな」「やってみよう」と、繰り返したり試したりして遊んでいる。	③ 友だちにも思いや考えがあることを知ったり、一緒に遊ぶ楽しさを味わったりしている。

5 保育指導計画（全8時間）

次	子どもの姿	援助と環境構成	評価
1～3	<ul style="list-style-type: none"> ○おがくずを見る、触る。 ○おがくず粘土について話を聞く。 ○実際におがくず粘土に触れて遊ぶ。 ○遊び終わったら、袋に入れて保管をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○保育者も一緒に楽しんで遊び、「ふわふわ」「いい匂い」など、子どもの素直なつぶやきや思いに共感しながら関わることで、そのもので遊ぶ楽しさを存分に感じられるようにする。 ○楽しかった思いを受け止めたり共感したりすることで、次の活動に期待をもつことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ア① イ①③ ウ①
4～6	<ul style="list-style-type: none"> ○さまざまな道具を使って遊ぶ ○食べ物に見立てたり、好きな形を作ったりして遊ぶ。 ○できたものを、作品棚に飾る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○保育者は、一人ひとりのしたい遊び方を受け止めたり認めたりしながら遊びに参加し、自由にのびのびと作る楽しさを感じられるようにする。 ○作ったものを飾れるように、十分な広さの作品棚を準備して自由に見学できるようにし、自分だけでなく友だちの作ったものも大切に扱えるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> イ②③ ウ①③ ウ②
7. 8	<ul style="list-style-type: none"> ○作品棚を見て、粘土の感触や様子が変わっていることに気付く。 ○再利用について話を聞く。 ○土に還し、その変化を日々観察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○今まで遊んできた粘土の状態を振り返ったり、その様子や感触の違いを比べたりしながら関わる。 ○土に還すことで、土の中で栄養になったり、土として生まれ変わって使い続けられたりすることを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ア① ア②